

1. 鉄筋の表示記号

Table with 4 columns: 鉄筋径, 表示記号, 鉄筋径, 表示記号. Lists various reinforcement diameters and their corresponding symbols.

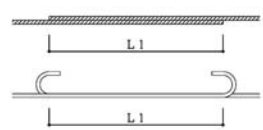
(注) 本図集において、鉄筋の表示方式は、上記の形式とする

2. 鉄筋の表示方式

Table with 2 columns: 表示方式, 表示例および内容. Shows examples of reinforcement symbols and their descriptions.

(注) 本図集において、鉄筋の表示方式は、上記の形式とする

・L1(重ね継手)の長さは下図に示す値とする。



公共住宅標準詳細設計図集

3. 鉄筋の定着および継手長さ

Table with columns for concrete strength, reinforcement type, hook status, and development/overlap lengths (L1, L2, L3).

継手の定着
・重ね継手と定着の長さは3の表を基準とする。ただし径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い方の公称径による。

・L1は継手並びに下記及びの以外の定着長さを示す。
・L2は異形鉄筋で断面破壊のおそれのない箇所での定着長さを示す。
・L3は小梁及び床版の下端部の定着長さを示す。但し、基礎埋込板、これを受ける小梁などは除く。

共通事項(その1)

R-1-1

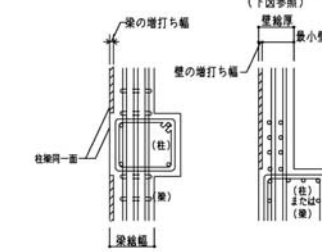
1. 鉄筋のかぶりの厚さの最小値 (mm)

Table showing minimum reinforcement cover thickness for various concrete parts like slabs, walls, and columns.

(注) 1. 目地がある場合のかぶり厚さは、目地底からとする。
2. 上表は、構造用軽量コンクリートの場合も含む。
3. 仕上げありとは、モルタル塗り・タイル張り等の仕上げのあるものとし、仕上げ塗材等により鉄筋の耐久上有効でない仕上げのものを除く。

2. 梁壁の増打ち幅

・壁体で柱と梁が同一面では上る場合については、納り上、最も外側になる鉄筋のかぶり厚さを確保し、梁の増打ち幅を決定する。



公共住宅標準詳細設計図集

仕

棟

附

記

事

項

共通事項(その3)

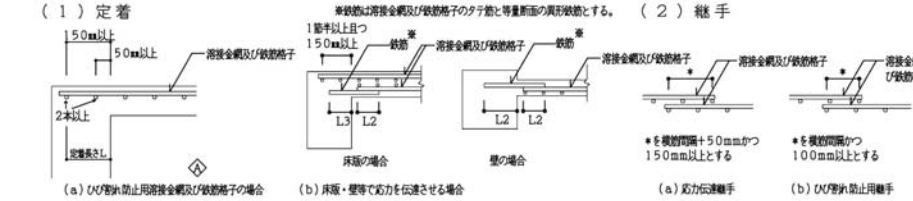
R-1-3

1. 鉄筋の折曲げ規準

Table showing bending standards for reinforcement, including diagrams and concrete strength requirements.

(注) Dは、曲げ内径

2. 溶接金網及び鉄筋格子の定着と継手



公共住宅標準詳細設計図集

・フックを必要とする末端部を次に示す。
1) 異形鉄筋では常筋、あばら筋
2) 煙突に用いる鉄筋(壁の一部となる場合を含む)
3) 一般階柱、梁(基礎梁を除く)の出露部分の重ね継手

・ひび割れ防止に用いる溶接金網及び鉄筋格子の定着長さは、支持部材の内側表面から溶接金網及び鉄筋格子の最外端の接合部までの距離とし、その値は横断間隔に50mmを加えた長さ以上、かつ150mm以上とする。

附

記

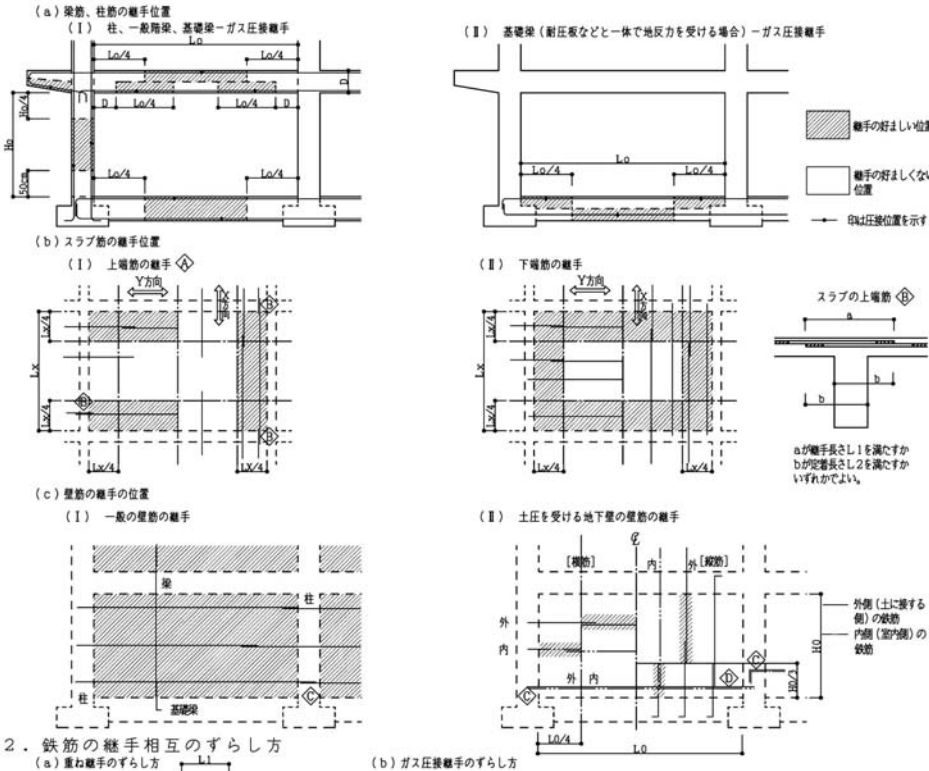
事

項

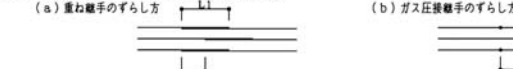
共通事項(その2)

R-1-2

1. 鉄筋の継手位置(ラーメン構造用)



2. 鉄筋の継手相互のずらし方



仕

棟

附

記

事

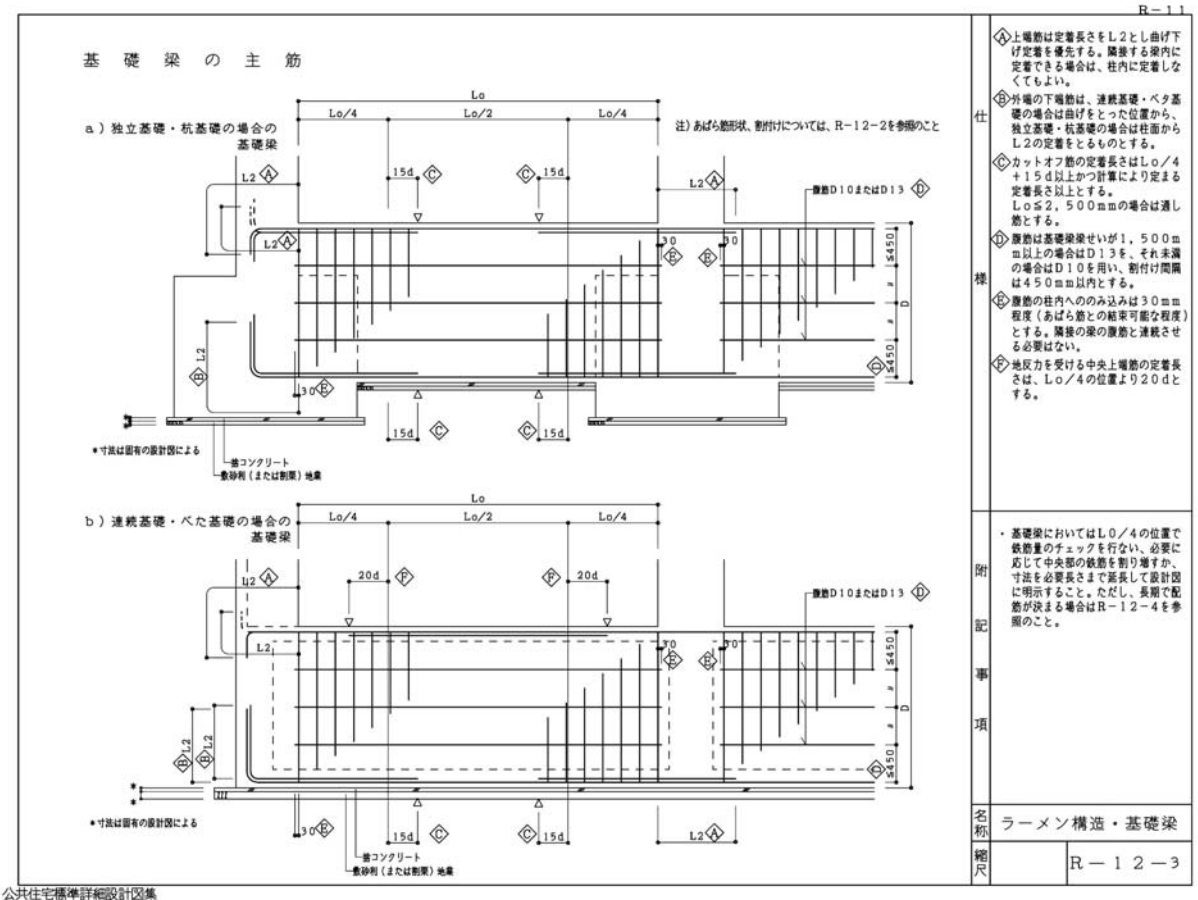
項

共通事項(その4)

R-1-4

Table with project information: 住宅建築工事(第 工区), 鉄筋コンクリート構造, 配筋基準図(1), 縮尺, 図面番号, 愛知県建設部建築局公営住宅課





R-1.1

仕  
様

- 上端筋は定着長をL/2とし曲げ下げ定着を優先する。隣接する梁内に定着できる場合は、柱内に定着しなくともよい。
- 外端の下端筋は、連続基礎・ベタ基礎の場合は曲げもった位置から、独立基礎・杭基礎の場合は柱面からL/2の定着をとるものとする。
- カットオフ筋の定着長さはL/4+15d以上かつ計算により定まる定着長以上とする。L/4≦2,500mmの場合は過し筋とする。
- 筋は基礎梁せいが1,500mm以上の場合はD13を、それ未満の場合はD10を用い、割付け間隔は450mm以内とする。
- 筋の柱内へののみみは30mm程度(あばら筋との結束可能な程度)とする。隣接の梁の筋と連続させる必要はない。
- 地反力を受ける中央上端筋の定着長さは、L/4の位置より20dとする。

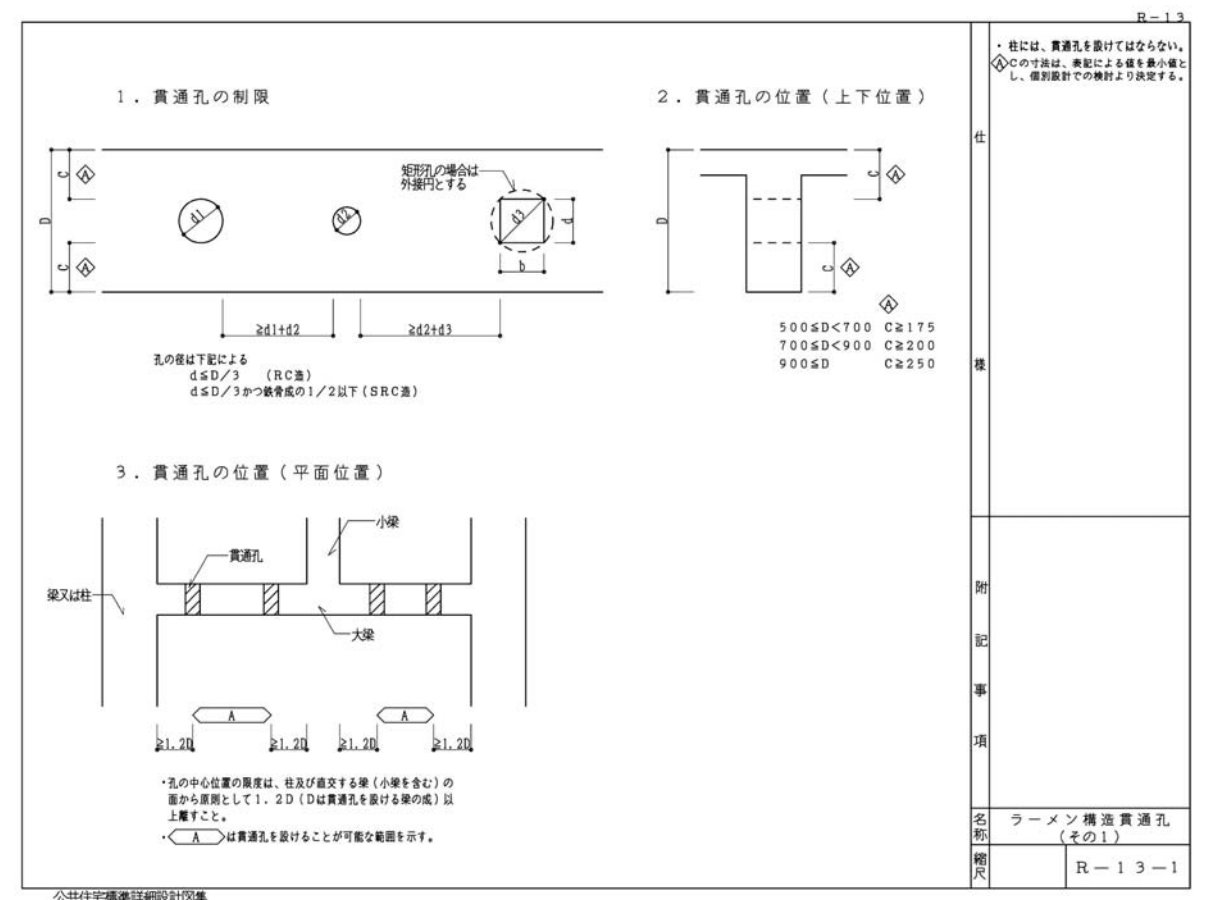
附  
記  
事  
項

- 基礎梁においてはL/4の位置で鉄筋量のチェックを行ない、必要に応じて中央部の鉄筋を削り落とすか、寸法を必要長さまで延長して設計図に明示すること。ただし、長さで配筋が決まる場合はR-1.2-4を参照のこと。

名  
称  
縮  
尺

ラーメン構造・基礎梁  
R-1.2-3

公共住宅標準詳細設計図集



R-1.3

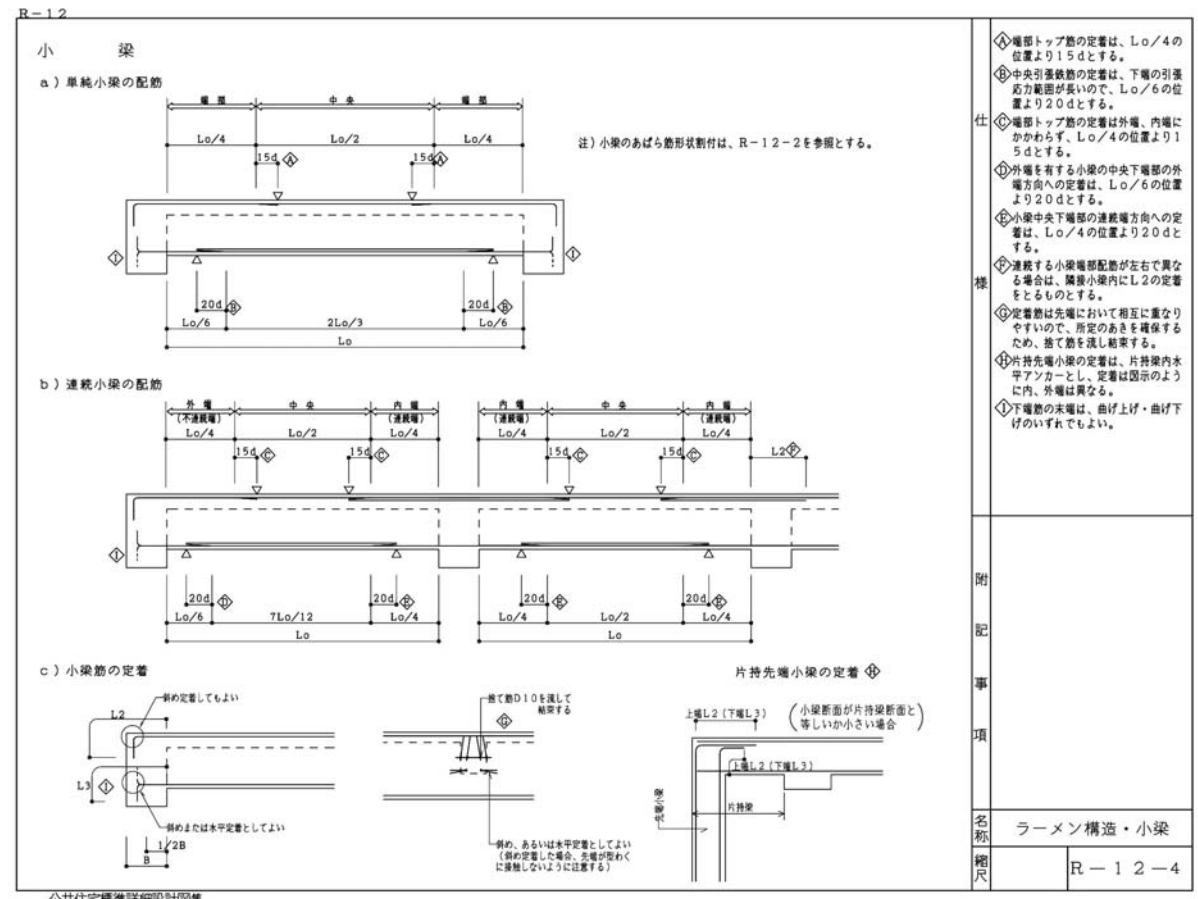
仕  
様

- 柱には、貫通孔を設けてはならない。
- の寸法は、表記による値を最小値とし、個別設計での検討より決定する。

附  
記  
事  
項

ラーメン構造貫通孔 (その1)  
R-1.3-1

公共住宅標準詳細設計図集



R-1.2

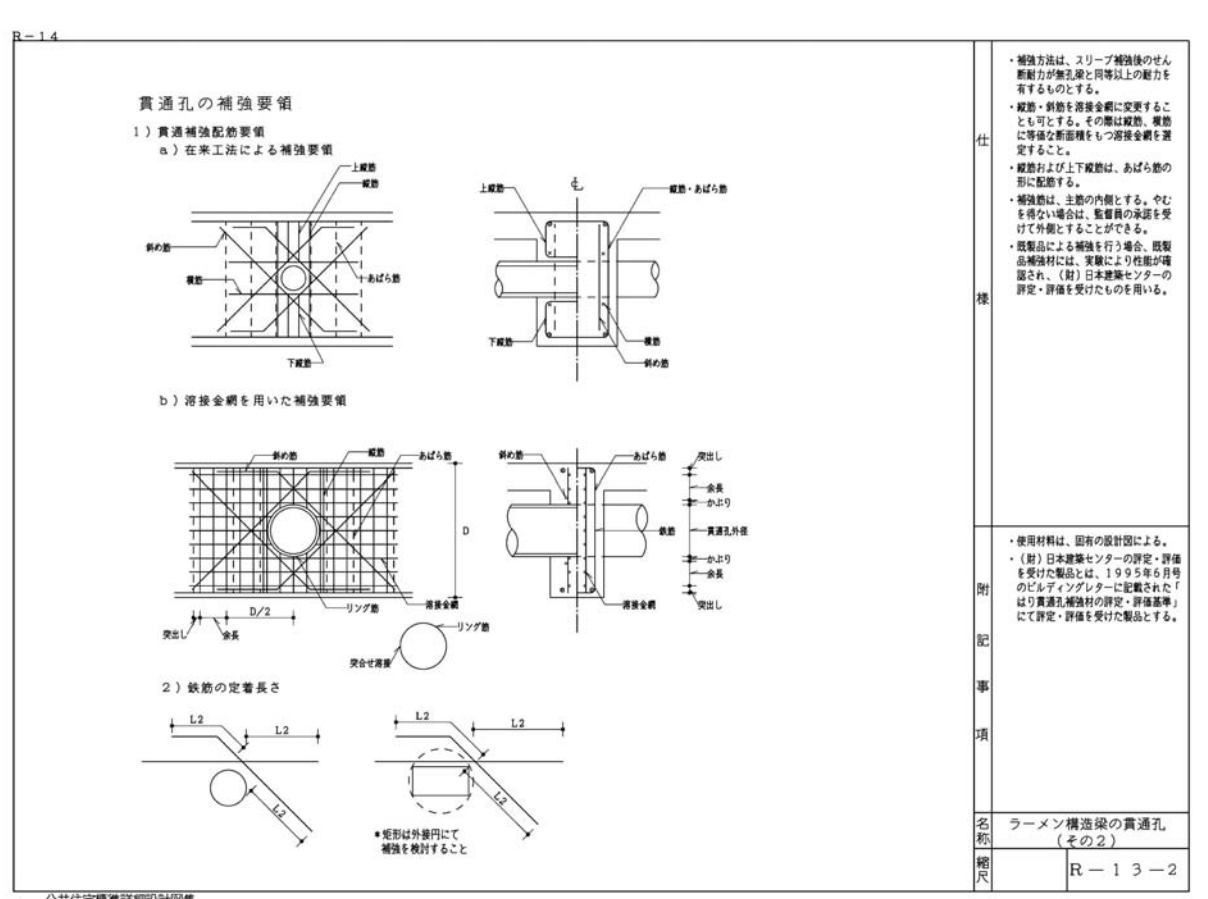
仕  
様

- 端部トップ筋の定着は、L/4の位置より15dとする。
- 中央引張鉄筋の定着は、下端の引張筋力範囲が長いので、L/6の位置より20dとする。
- 端部トップ筋の定着は外端、内端にかかわらず、L/4の位置より15dとする。
- 外端を有する小梁の中央下部の外端方向への定着は、L/6の位置より20dとする。
- 小梁中央下部の連続端方向への定着は、L/4の位置より20dとする。
- 連続する小梁端部配筋が互いに異なる場合は、隣接小梁内にL/2の定着をとるものとする。
- 定着筋は先端において相互に重なりやすいので、所定のあきを確保するため、捨て筋を流し筋とする。
- 片持先端小梁の定着は、片持梁内水平アンカーとし、定着は図示のように、外端は異なる。
- 下端筋の末端は、曲げ上げ・曲げ下げのいずれでもよい。

附  
記  
事  
項

ラーメン構造・小梁  
R-1.2-4

公共住宅標準詳細設計図集



R-1.4

仕  
様

- 補強方法は、スリブ補強後のせん断耐力が無孔梁と同等以上の耐力を有するものとする。
- 縦筋・斜筋を溶接金網に変更することも可とする。その際は縦筋、斜筋に等価な面積をもつ溶接金網を選定すること。
- 縦筋および上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
- 補強筋は、主筋の内側とする。やじりがない場合は、監督員の承認を受けて外装とすることができる。
- 既製品による補強を行う場合、既製品補強材には、実線により性能が確認され、(財)日本建築センターの認定・評価を受けたものを用いる。

附  
記  
事  
項

ラーメン構造梁の貫通孔 (その2)  
R-1.3-2

公共住宅標準詳細設計図集

住宅建築工事(第 Ⅱ 区)		図面番号
鉄筋コンクリート 構造	縮尺 A1: — A3: —	No.
配筋基準図(3)		
校 図	製 図	設 計 平成 年 月
愛知県建設部建築局公営住宅課		

R-1.5

### 非耐力壁

#### 1) 非耐力壁 配筋リスト

呼称	非耐力壁					備考
	W100	W120	W150	W180	W200	
断面図 (立断面)						幅止め筋配置
縦筋	D10 φ 250	D10 φ 200	D10 φ 150	D10 φ 200	D10 φ 200	
横筋	D10 φ 250	D10 φ 200	D10 φ 150	D10 φ 200	D10 φ 200	
開口部補強筋	1 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	
開口部斜め補強筋	1 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	

#### 2) コンクリートブロック壁 配筋リスト

呼称	コンクリート壁			備考
	CB100	CB150	CB200	
断面図 (立断面)				● 縦筋は配筋率を示す。
縦筋	D10 φ 400	D10 φ 400	D10 φ 400	
横筋	D10 φ 600	D10 φ 600	D10 φ 600	

#### 3) 非耐力壁の割付け

仕 様  
● 壁のダブル配筋を行う場合、横筋は縦筋の外側に配す。  
● 壁の幅止め筋の配置要領は、上記以外でのダブル配筋を行う場合に適用とする。

附 記  
事項  
名 ラーメン構造非耐力壁 (その1)  
縮 尺 R-1.4-1

R-1.5

R-1.6

### 4) 非耐力壁開口補強, スリット詳細

注) 開口部補強筋は全てD13を示し、---表示の補強筋はW120以上の場合に使用する。

(a) フレーム内の場合 (b) フレーム外の場合

#### 5) ひび割れ防止用補強筋

溶接金網	厚 度	W100, W120, W150, W180, W200			
		a	b	a	b
6φ 100x100	200	200	200	-	-
8φ 100x100	200	200	200	400	200

格子鉄筋	厚 度	W100, W120, W150, W180, W200			
		a	b	a	b
D6 100x100	200	200	200	-	-
D10 100x100	-	-	-	200	200

● 印の寸法は右表を参照のこと。

仕 様  
● スリットの要領はR-1.4-3を参照する。  
● 開口部が、梁に接する場合はそれぞれ縦筋、横筋の補強筋は不要とする。  
● 開口補強筋はリストに表示したようにW100では1-D13, W120~W200では2-D13とする。  
● 見付200mm×200mm以下の開口部については補強は不要とし、縦・横筋は開口部を避けて割付ける。  
● 斜め筋は縦筋、横筋の本数、サイズを増強して省略することができる。斜め筋のかわりに溶接金網、格子鉄筋を用いてもよい。  
● 開口部周囲に、斜め筋のかわりにひびわれ防止用の溶接金網、または格子鉄筋を用いる場合、サイズおよびピッチを示す。  
● 開口部斜め補強筋は、ピッチ計算による他、D10φ100を最小とする。

附 記  
事項  
● スリット位置は設計図に明示すること。

名 ラーメン構造非耐力壁 (その2)  
縮 尺 R-1.4-2

R-1.6

R-1.7

### 6) 完全スリット及び部分スリット要領

(a) スリット設置例

(b) スリット部分の断面補強

① 部分スリット  
● 梁-非耐力壁  
● 柱-非耐力壁

② 完全スリット  
● 梁-非耐力壁  
● 柱-非耐力壁

● 壁のダブル配筋を行う場合、横筋は縦筋の外側に配す。  
● スリット位置は設計図に明示すること。  
● スリット幅は、本体と同等の変形を考慮し適宜の場合、二次壁の高さ(梁の場合は二次壁の長さ)の1/10以上とする。

名 ラーメン構造非耐力壁 (その3)  
縮 尺 R-1.4-3

R-1.7

R-1.8

### 耐力壁・地下壁

#### 1) 耐力壁の配筋, 定着

(a) 柱への定着 (b) 梁への定着

#### 2) 地下壁の配筋, 定着

(a) 柱への定着 (b) 梁への定着

● 耐力壁・地下壁のコンクリートの端打ち厚さは図別の設計図による。

仕 様  
● 外側鉄筋は柱、梁断面内では定着せず、軸手は壁厚部に定着する。  
● 内側鉄筋は柱、梁断面内に定着するか、または差し筋とする。  
● 配筋の第1鉄筋は柱、梁面より50mmの位置に定着し、壁筋はこれを基準に割付ける。  
● 外側鉄筋の本端はL2かつ柱、梁断面内中心線まで定着する。先端の折曲角は90°以上とし、余長は150mm以上を確保する。  
● 鉄筋は、梁をこえて軸手長さの分だけ立上げる。また上下の鉄筋ピッチが異なるときは軸手を折してよい。  
● 外側鉄筋は梁内にL2かつ水平に150mmの定着をとるものとする。  
● 基礎梁への定着は表示の幅以上でよいが鉄筋の位置の定着のため、1mピッチ程度で軸手の上端まで下げる。  
● 内側鉄筋は梁内にL2の定着をとるものとする。  
● 配筋の第1鉄筋は柱、梁面より50mmの位置に定着し、壁筋はこれを基準として割付ける。  
● 外側鉄筋は原則として柱内定着せず、壁厚部で軸手を定着するものとする。  
● 内側鉄筋は柱内に定着し、定着長はL2とする。  
● 鉄筋の配置により○の幅が変化するの設計上の"te"の幅は配筋を考慮の上決定すること。  
● 柱主筋D25、梁筋D16のときは、○φ=4mmとする。  
● 幅止め筋はD10φ1,000mm以内とする。

● 壁のダブル配筋を行う場合、横筋は縦筋の外側に配す。ただし地下壁については、縦筋は横筋の外側に配す。

附 記  
事項  
名 ラーメン構造耐力壁・地下壁  
縮 尺 R-1.5

R-1.8

住宅建築工事(第 工区)			図面番号
鉄筋コンクリート構造 配筋基準図(4)		縮尺 A1: - A3: -	
検 査	製 図	設 計 平成 年 月	愛知県建設部建築局公営住宅課

R-1.9

### 1. 梁増打ちコンクリート要領

軸方向補強筋リスト	
B, D (mm)	e (mm)
50 < e ≤ 200	
B, D ≤ 300	2 - D16
300 < B, D ≤ 500	3 - D16
500 < B, D ≤ 700	4 - D16
700 < B, D ≤ 900	5 - D16
900 < B, D ≤ 1,100	6 - D16
1,100 < B, D ≤ 1,300	7 - D16

※ e ≤ 50mm の場合は補強筋不要とする。

### 2. はり間方向屋根根梁水勾配増打部の補強要領

はり間方向屋根の水勾配増打部の補強は下記に依る。

公共住宅標準詳細設計図集

仕  
様

- 軸方向補強筋は増打ちコンクリート断面積の0.4%以上かつD16以上、間隔は200mm以下とする。定着は5dとする。補強筋を表に示す。5d以上の定着をとる場合の補強筋については構造設計により決定する。
- あばら補強筋はD10以上の鉄筋を使用し、ピッチはあばら筋と同一ピッチとする。また実断面への定着は300mm以上とする。
- 梁の増打ちコンクリートの厚さeは200mm以下とする。
- h/e ≥ 1.50の場合は、補強筋門D10φ250をさらに水下半分の1/2まで延長して配置する。

附  
記  
事  
項

- 梁の増打ちコンクリートの厚さeが安全率にわたり200mmをこえる場合これを正味の断面と考え、正味の計算にとり入れるものとする。
- 5d以上の定着をとる場合の補強筋については構造設計により決定する。

名称  
縮尺

ラーメン構造 梁増打ち要領  
R-16-1

R-2.1

### 設備機器埋込み要領

公共住宅標準詳細設計図集

仕  
様

- 柱には原則として設備機器の埋込みは行わない。設置する場合は設備機器設置部分を増し打ちする。
- 設備機器埋込み部増し打ち厚さ“e”がe ≤ 50mmの場合は補強筋の必要はない。
- 増し打ち厚さ“e”がe > 50mmの場合の補強筋はR-16-2に準ずる。
- 設備機器が増し打ち部の補強筋を切断する場合、補強筋と設備機器の両側に分けて配置する。
- 埋込み機器が壁の鉄筋を切断しない場合は、補強筋の必要はない。この場合は設備機器と壁とのあきに十分注意する。
- 壁に設ける埋込み機器が壁の鉄筋を切断しない場合は、切断した本数だけ機器の外側に補強筋を配する。この補強筋と壁の鉄筋はあき手とし、重ね手長さは1lとする。

附  
記  
事  
項

- 設備機器の取付方法は、設置する部分の柱を増し打ちする方法と内装仕上材にて処理する方法がある。内装仕上材にて処理する方法は、意匠図による。

名称  
縮尺

設備機器埋込み要領  
R-16-3

R-2.0

### 1) 柱増打ちコンクリート要領

軸方向補強筋リスト	
B, D (mm)	e (mm)
50 < e ≤ 125	
300 < B, D ≤ 500	3 - D16
500 < B, D ≤ 700	4 - D16
700 < B, D ≤ 900	5 - D16
900 < B, D ≤ 1,100	6 - D16
1,100 < B, D ≤ 1,300	7 - D16

※ e ≤ 50mm の場合は補強筋不要とする。

公共住宅標準詳細設計図集

仕  
様

- 柱の増打ちコンクリートの厚さeは原則として125mm以下とする。
- 軸方向補強筋は増打ちコンクリート断面積の0.8%以上かつD16以上、間隔は200mm以下とする。定着は5dとする。補強筋を表に示す。
- 鉄筋の補強は実断面の等筋と同様とし、間隔は200mm以下とする。また実断面に300mm以上定着する。

附  
記  
事  
項

- 柱の増打ちコンクリートの厚さeが125mmをこえる場合は、正味の柱断面として計算にとり入れるものとする。
- 5d以上の定着をとる場合の補強筋については構造設計により決定する。

名称  
縮尺

ラーメン構造 柱増打ち要領  
R-16-2

R-2.2

### 1. 直接基礎の場合

(a) 台形断面基礎 (b) 長方形断面基礎

公共住宅標準詳細設計図集

仕  
様

- 2m×2m以下の独立基礎においては、施工上の容易さを考え台形断面とし、なお、これ以上の大きな基礎で台形断面とした場合は、テーパ部分を覆う必要のない勾配(15°~20°)以下とする。
- フーチング主筋は、本数は設計図による。フーチング幅において60mm以上の余裕をとる。端部のフーチング主筋1本目は、90mm以上の余裕をとって配置する。
- D1, D2, D3は、固有の設計図による。
- はかま筋は基礎に浮上力が作用する場合は必ず配置し、鉄筋、ピッチは固有の設計図による。
- 基礎下端と基礎フーチング下端は、基礎下端筋とフーチング主筋が重なるのを避けるため、100~150mmのあきをとる。

附  
記  
事  
項

名称  
縮尺

ラーメン構造基礎(その1)  
R-17-1

住宅建築工事(第 工区)		図面番号
鉄筋コンクリート構造	縮尺	No.
配筋基準図(5)	A1: - A3: -	
校 図	製 図	設計 平成 年 月
愛知県建設部建築局公営住宅課		

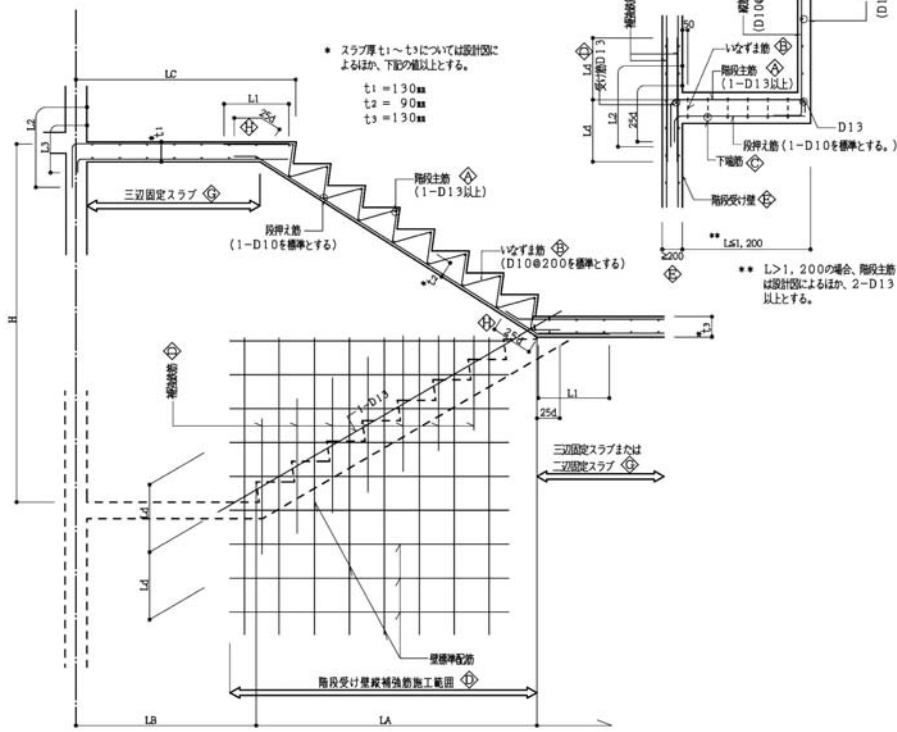








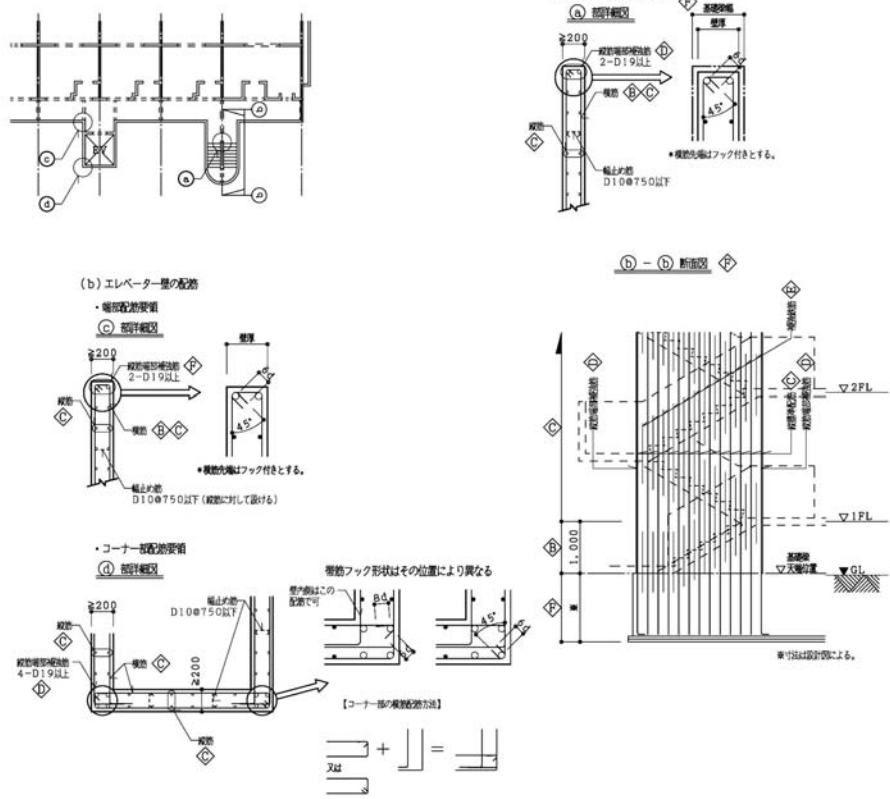
階段配筋詳細図  
1) 片持階段の配筋 [住棟内]



- 階段主筋は設計図によるほか、1-D13以上とする。
  - いかなる主筋はD10@200を標準とし、階段受け壁面より50mmの位置に第一いかなる主筋を配筋する。
  - 下端筋はD10@200を標準とする。(ピッチはいかなる主筋と同じとし、いかなる主筋に配筋する。)
  - 片持階段受け壁に設ける段末の曲げ補強筋の有無、及びその定数長さは設計図による。
  - 階段受け壁の厚さは200mm以上とする。
  - 屋外階段受け壁の配筋については、R-55-3を参照する。
  - 階段手すりの配筋は片持スラブ先端の手すりの配筋要領(R-51-7)に準ずる。
  - 踊り場のスラブは三辺固定スラブ、または二辺固定スラブとして計算した上でモチアミ配筋を行うものとする。
- 手すりの厚さは設計図による。  
●● L>1,200の場合、階段主筋は設計図によるほか、2-D13以上とする。
- t1=130mm  
●● t2=90mm  
●● t3=130mm
- L.A, L.B, L.C, Hは固有の設計図による。

名称 階段廻り(その1)  
縮尺 R-55-1

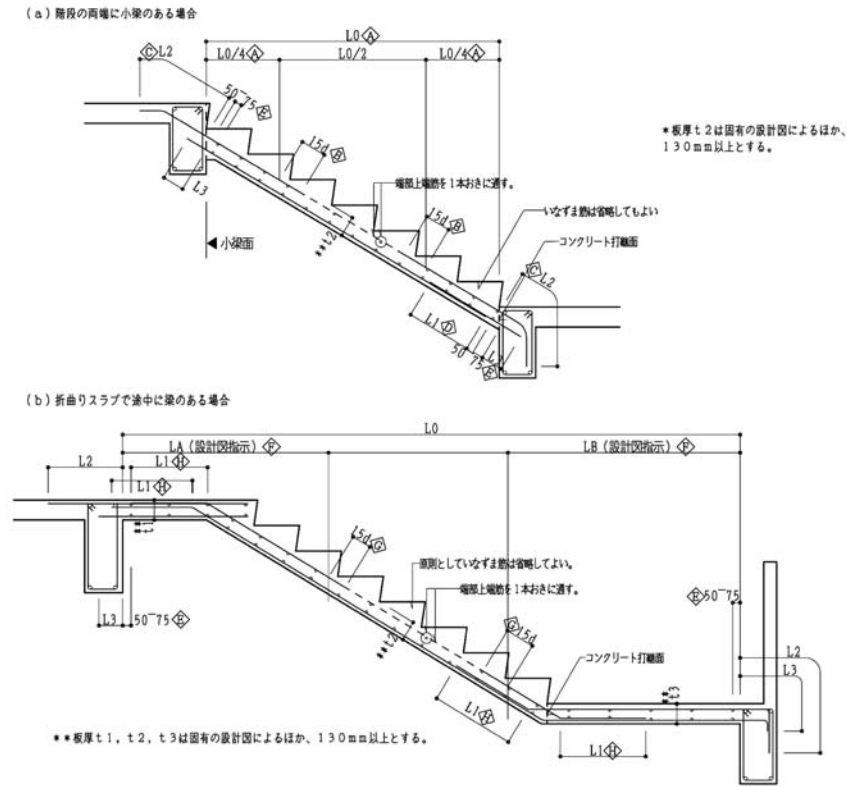
3) 屋外階段及びエレベーター壁配筋要領



- 建物本体から突出する屋外階段の受壁及びエレベーター壁の構造は基礎の外側に等脚形状で配筋する。
  - 受壁筋は、基礎梁天端から1m以内は径、ピッチ計算による他、D10@100以下となるように配筋する。
  - 壁筋・構造は径、ピッチ計算による他、D10以上の鉄筋を@250以下となるように配筋する。
  - 階段端部補強筋は計算による他、壁端部は2-D19以上、コーナー部は4-D19以上の鉄筋を配筋する。
  - 壁筋の配筋詳細については、R-55-1を参照する。
  - 配筋は基礎梁内で十分な拘束を行う。この時、基礎梁幅は壁厚以上とする。
- 段部の配筋(いかなる主筋等)はR-35, R-55-1による。  
●● 本図は、“ラーメン構造” “壁式構造”にて共通とする。

名称 階段廻り(その3)  
縮尺 R-55-3

2) スラブ階段の配筋



- 主筋の端部中央の区分線は、階段内のスパンL0の1/4の点とする。(通常のスラブと同様である。)
  - 端部トップ筋の余長は、L0/4の点より1.5dとする。
  - 端部上端主筋は隣接するスラブ内、または梁に十分定数させること。定数長はL2とする。
  - 軸手区分はL0/4の区間内とする。コンクリート打継面があるので注意すること。
  - 配力筋の端部位置を示す。配力筋はこの位置から削り取る。
  - 主筋の端部中央の区分線は設計図によるものとする。
  - 端部の上端筋の余長は区分線より1.5dとする。
  - 折曲り点において上端筋、下端筋とも軸手長さL1をとって、各スラブ鉄筋と連続させる。
- 板厚t2は固有の設計図によるほか、130mm以上とする。
- 板厚t1, t2, t3は固有の設計図によるほか、130mm以上とする。

名称 階段廻り(その2)  
縮尺 R-55-2

住宅建築工事(第 工区)		図面番号
鉄筋コンクリート構造 配筋基準図(9)		No.
縮尺 A1: - A3: -		
校 図	製 図	設計 平成 年 月
愛知県建設部建築局公営住宅課		